

---

# 着地した場所は

四季

---

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

## 注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

### 【小説タイトル】

着地した場所は

### 【Nコード】

N1464L

### 【作者名】

四季

### 【あらすじ】

時をかける少女の

主人公

(原作とは別の人)が

家庭教師ヒットマンリボーン！の世界に  
来てしまう。

個性的な人がいっぱいなの

この世界だが、

自分の帰るべき場所が  
違うのはわかっていた。  
たくさんの人と出会い  
もう一つの中学生体験を  
する。

「帰りたい」

その気持ちが強くなれば  
なるほどタイムリープは  
出来なくなるの  
だろうか？  
そんなこと誰も  
わからないだろう。  
だから私は困っていた。  
もし、この世界に一生  
いるとなれば  
ある意味恐怖だ。

なぜなら

この世界に存在しない  
はずの自分が  
今こうして  
歩いたり話してるのは  
夢なのかと思うくらい  
楽しすぎて  
ハマるくらいに。

だから

本当は

心のどこかで恐怖に  
震えているのかも  
しれない。

強がっていたのかも  
しれない。

一度踏み出した領域に  
入ったらそこは

底無し沼のような世界。

世界はねじれた。

もがけばもがくほど、

深く沈んで

後戻り出来なくなるのは  
知っているはずだった。

誤字脱字が

あるかもしれません。

更新不定期ですが、

よろしくお願いします。

## 1 始まり

私はタイムリープした。

後何回可能だろうか？

どれくらいいられるか？

そんな疑問を抱きながら  
目を閉じた。

「痛たた…」

道路にしりもちついた。  
ん？道路？

何故道路？

「ここ…初めて見る…」

灰色の道路が何処までも  
続いている住宅街の  
ところに来ていた。  
近所にこんなところが  
あったんだと思った。

しばらく歩くと  
学校が見えてきた。

「よかった…」

安心して私は門に  
入っていった。

そこまではよかった。

これから気づく異変に  
私はどうすることも  
できなくなるのだ。

こっそり職員玄関から  
入り、  
教室に向かう。

すれ違う人達はみんな  
私を見る…というのは  
気のせいだろう。

思いつきり扉を開けたら  
見知らぬ顔ぶれが  
いましたー

「……………」

はい？

何だろう、教室の感じが  
違う…。

しかも制服の色とか  
違う!？

落ち着け、落ち着くんだ

私!!

## 2 勘違い

直感ですが

私は別世界に

来たようです…。

帰りたい、帰りたい。

帰りたい帰りたい帰りたい!!!

私は教室を飛び出して  
階段を登った。

屋上に着くと  
フェンスに手をかけて  
息を吐く。

「ここから跳べばきっと  
…元の私のいるべき世界  
に帰れる…。」

そのつぶやきを誰かが  
聞いていたとは知らずに  
跳ぶ準備を始める。

「よし、行くよっ……」

助走が徐々に速くなり  
踏み切った。

…のはずだが直前に  
誰かに止められた。

「は、はやまっちゃ  
だめ!!」

はい？

「こんな高さから飛び  
降りたら……」

そういつて止めたのは  
ツンツン頭で茶髪の  
男の子。

「…勘違いしてる？」

「え……」

気をまぎらわせた後、

捕まれてた手を  
振りほどいて跳んだ。

### 3 おかしいな

「き、消えた…」

彼は跳んだ少女を見て驚いていた。

その頃

「ギャツ」

成功した…？

「失敗」

私かというと、先程の教室にいた。

「…」

何で帰れないの？

ちゃんと跳んだはず、

間違えた訳じゃないのに

どうして？ー

ガララッ

「はあはあ、つてえええ！？」

振り返ると屋上にいた男の子：「とうより少年といた方がいいのかな？」

「さつき

消えたのに何で！？」

私が聞きたいよ。

「十代目く何処に行つてたんですか！

…何かありましたか？」

銀髪の少年が心配そうに少年を見る。

「てめえ十代目に何しやがった」

睨んできたから睨みかえしてみた。

こいつ不良じゃね？  
いかにも悪そうだし、  
喧嘩売ってきたし。

「何もしてない。

ていうかまだ

勘違いしてるの?」

「なっ、えっ、その…」

十代目と呼ばれた少年は  
目を伏せながら話す。

そこへ爽やかな人が  
割り込んできた。

「ん?勘違いってなんの  
ことだ、ツナ」

あれ?

今度は十代目じゃなくて  
ツナって呼ばれてる。

#### 4 巻き込まれる

十代目とツナは同じ人物  
であると理解。

「ここ、何処？」

シーン…。

「すみません、ここ何処  
ですか？」

「何処つて…」

「ここは」

「並盛だぜ？」

ツンツン頭の少年から銀髪の少年、  
その次に話に  
割り込んできた少年。

並盛…？

「ご飯は並盛だよな？」

「いや、ここは並盛って  
いうところだから」

珍しい地名。  
そういうのってアニメの  
世界にしかないと  
思ってた。

「じゃあここは並盛中  
…マジで？」

何で中学校に  
来てしまったんだ？  
自分の母校じゃない  
のに…。

しかも私は高校生。  
中学校に何の用が  
あるわけ！？

嘘だ…こんなの夢よ、  
悪い夢から  
早く覚める！！

「十代目、こいつ  
現実逃避してますよ」

「だ…だからさっき  
屋上で

あんなことをっ！…！！」

「あんなこと？」

ツンツン頭の少年は  
私の前に来ると  
こう言った。

「命は大事にしないと  
だめだよっ…」

命？大事にしていますよ。

「何があつたか  
知らないけど…  
元気出して下さい…。  
ていうか  
何でそんなことをする  
必要が…あつたん  
ですか!？」

跳んだことについて  
聞いてるのかな？

「後々考えてみればあの  
高さはまずかつたと  
思ってる。

まさか誰かが見てた  
なんて気づかなかつた  
から…。

でもね、決して君の  
考えてることを  
した訳じゃないの。  
人には事情つてものが

あるの」

「そんなの言い訳に  
ならないよ!!  
だつて

あの高さから飛び降

「俺も見てたぞ」

リボーン!？」

「ちやおっス、

また会つたな」

またまた

割り込みですか…。

まあ、飛び降りたつて  
ことが

周りに聞こえなくして

くれたのはサンキュ。

「初めまして…」

「その様子だと気づいて  
いないようだな」

…つまり、あの屋上には

ツンツン頭の少年と

ちやおっス

と言つてきた人の

二人がいたつてこと?

「ところでツナ、  
今日はあれだぞ」

話がそれて一安心。

「持ち物検査だぞ」

その声に教室にいる  
人達が騒がしくなる。

ところどころで焦りの  
色が見える。

「風紀委員がそろそろ  
来ると思うぞ」

「ひいっ!!!!  
風紀委員って雲雀さんも  
来るってこと  
だよね!?!」

ツンツン頭の少年は  
頭を抱えていた。

どうやらその雲雀さん  
という人が恐いらしい。

「あ、来たぞ」

前から人が入ってきた。

「席に着け、これより  
持ち物検査をする」

みんなが席に着くが  
私はここの生徒じゃない  
ので後ろで立っていた。

「よかつた〜。  
草壁さんで  
助かつた〜…」

そう呟いている声が耳に入ってきた。

誰もが安心していた。  
しかし、校内放送が  
その空気を壊した。

「2年A組は体育館に  
来るように。  
因みに

僕は機嫌が悪いんだ。  
三分以内に来ないと全員  
咬み殺すよ」

立派な脅迫です。  
みんな鞆を持って  
体育館に向かいます。

さて、私は帰ろう。こんなことをしている

暇はないんだ。

そう思っていたら

巻き込まれた。

## 5 持ち物検査

― 体育館 ―

2年A組が集まった。

突然の呼び出しに誰も文句を言わないのが…。

「恭さん、

何で体育館に…」

「疲れたからね」

ひそひそ話しているのが聞こえる私ってすごい！？

「じゃあ始めるよ」

次々と鞆の中がチエックされていく。

気づけば私は風紀委員の前に立っていた。

「君、何処の生徒？  
並盛じゃないね」

はい、そうです。

「来たくてここに来たわけじゃない……」

「……」

「用は済んだでしょ？」

帰ろうとした。

が、勝手に鞆を開けた。

「これ……何？」

風紀委員が手にしたのは  
理科室で見つけたくるみ  
みたいなあれ。

「返して。」

人の物を盗むのは  
泥棒だよ」

「盗んでないけど」

……。

「人の物を取るのも  
……取り上げるのも  
泥棒だよ」

あのくるみが  
何故ここにあるのか  
知らないけど、  
チャンス。

「そんなにこれが  
大事なの？」

すると

空中にくるみが飛ぶ。  
スローモーションでも  
見ているような  
感じだった。

「あ……」

間に合わなかった。  
くるみは誰にも  
あたることなく  
床に落ち、真っ二つに  
割れた。

その時感情が芽生えた。

「…な……」

怒りの感情。

「くるみが割れた」  
ただそれだけなのに。

「ふざけるな!!!  
それがどれだけ大事な  
ものか分かってんの!?  
どうしてくれるの!？」

周りからすれば  
くるみ大好きっ子に  
思われてるだろう。  
このくるみのおかげで  
タイムリープが  
できたのだ。

ここに来る前に  
使ったのは違う物  
かもしれない。  
けど、そのうち  
タイムリープする回数が  
無くて、  
本当に帰れなくなったら  
終りだ。

「ああ!!! 終りだ、  
もう終わり!!!」

ギャーギャー叫ぶ私。

くるみ=この世界から  
脱出できる希望の光

「くるみを直せ、今すぐ  
割れる前に戻せ」

「（この子無茶苦茶だ）」

「だいたい私はこの  
生徒じゃないの。  
それにさっきの  
校内放送は何？  
咬み殺す？  
やれるもんなら  
やってみやがれ！！！」

シュツ

風紀委員の手には武器。  
持ち物検査に使っていた  
長机はそれにより  
めり込んだ。

「咬み殺す……」

あ、  
ちよつと待って下さい。  
さっきのは冗談ですよ？  
冗談。  
本気にしないで  
下さいよ〜。

「ちょっとマジで」違うんです！」「は？」

ツンツン頭の少年は  
何やら風紀委員を  
説得してくれるようだ。

「この子は並盛中に通う人で、  
制服がまだ届いてなくて  
前の学校の制服で  
来てるんです」

？

「何言ってるのかな？  
そんな話、初耳だよ？」

「じゃあ  
高って入ってるのは何？  
高校生が何の用？」  
「そ、それは…」

「コスプレだぞ」

教室で会った赤ちゃん。

「ワオ！赤ん坊  
久しぶりだね」

赤ちゃんを見た瞬間に  
態度が変わった  
ような…。

「そういうことだ。  
仲良くしろよ」

赤ちゃんのおかげで  
咬み殺されなく  
すんだけど、  
並盛の生徒ってことに  
されたし、制服は  
コスプレとされたし…  
どうなっちゃうの!?

## 6 牛とその他もろもろ

私はここの生徒として  
今日から頑張ります!!

みんな、よろしくね!

「って言えるかつ!!」

……シーン……

「あ、

今の独り言です。やだなあ  
そんな静かに  
ならなくなつて  
いいのに……」

ニヤハハハと  
笑つてみた。  
誤魔化しがきくと  
願いながら。

「おい、うるせえぞ」

「ニヤハハハハハ」

「おい」

「ニヤハハハハハ」

笑いが

止まらなくなった。笑い声と同時に

「リボーン見つけ!!」

その声の方に向くと  
牛がいた。

「ランボ様の登場  
だもんね〜!!」

牛はランボと名乗った。

すると赤ちゃんは  
威嚇射撃を開始した。

## 7 体育館のスピーカー（前書き）

！注意！

顔文字あります。

苦手の方は

読まないことを

おすすめします。

キャラ崩壊

あるかもしれせん。

前話と話がかなり跳んで  
いたらごめんなさい。

以上三点について  
述べさせて  
もらいました。

いつも着地した場所には  
足をお運びいただき  
ありがとうございます！

二ヶ月ほど更新  
していませんでしたが  
やっと更新できました。

次話まで

また空いてしまつかも

しれませんが

よろしく願います。

## 7 体育館のスピーカー

その時、

独特の笑い声（？）が  
聞こえてきた。

体育館の

スピーカーから。

「クフフ…」

と。

風紀委員長は

どこからともなく

トンファーを手にして

投げた。

「あ」

誰もがそう言うだろう。

クルクル回転しながら  
飛んでいくトンファーを  
見つめながら。

「並盛中にここまで  
簡単に入れるとは…。  
そして私は今!!」

キイイイイン  
(ハウリング)

正直うるさいと思った。  
みんなもそうだと思う。

「……この声は……」

隣にいる

ツンツン頭の少年、

沢田綱吉は

頭を抱えだした。

「知り合い？」

その問いに沢田さんは  
答えてくれなかった。

でも

赤ちゃんは沢田さんの  
代わりに答えてくれた。

「六道む」

「クハハハハ！！！」

(・|・) エツ……？

何、

何なのこの人クフフ…の  
次はクハハハハ！！！！？  
しかも赤ちゃんの  
言葉をさえぎった！？

「アルコバレーノ勝手に  
名乗らないで下さい」

どこから見てるんだよ  
放送室をただいま  
ハイジャックしてる人！

「私の名前は六道むく」

ドゴオッ！……！！

シーン…

スピーカーには  
めり込んだトンファー！。

静まり返る生徒達。

「草壁、スピーカーの  
修理よろしく」

と言い残して  
この場を去った。

残された生徒は何が  
あつたのか  
理解出来てない。  
私もその一人。

壊れかけたスピーカー  
からはいまだに  
ハイジャックの人の声  
うつすらと聞こえる。

「先程の音は  
なんだったのでしょうか？  
まあいいでしょう」

一息してからその人は  
また話し出した。

「君達、  
並盛中のセキュリティは  
あつけなさすぎる。  
警報一つも鳴らないの

ですよ？

こんな安全性のない学校なんか止めて黒曜中に」

ヒュンヒュンヒュン…

「あ

もう一つのトンファーが  
壊れかけのスピーカー  
目掛けて飛んでいった。

もう壊れかけではなく  
壊れたになった。

「ふん、

うちの生徒を  
転校させようと  
勧誘かい？」

委員長…

正論は正論だけど…

何て勝手な。

草壁さんと言う人の

立場になって

みたらこれはひどい。

今度こそ去った委員長。

ただその場に座り込んだ  
人が二人。

「び、びっくりした」

と沢田さん。

そして

「恭さん…、ここまで  
トンファーを…」

分かります、草壁さん。

頑張れ、草壁さん。

私には

それしか出来ません。

ごめんなさい。

でも、時間が空いたら手伝いに来ます。

それまで頑張って

草壁さん！！

放課後、

体育館をのぞくと

草壁さんがスピーカーの  
修理をしていた。

下駄箱の帰りに見知らぬ

制服の生徒と

すれ違った。

頭の上のフサはまるで  
パイナップル。

すれ違いにその人は  
「クフフ…」

きつと空耳だろう。

そうだ、うん。

そうであってほしいと  
思ったのかは何でか。

## 7 体育館のスピーカー（後書き）

ここまで読んでいただき

ありがとうございます

ございます！！！！

またのお越しを

お待ちしております。

## 8 帰り道また一つ

困った。

本当に困った。

私は今、  
並盛商店街にいる。

日が沈みかけている、  
つまり夕方。

今朝から色々嵐のように  
去っていったが、  
私は  
目的を忘れかけていた。

いくあてもない。

今から並盛中に  
引き返したら

あの風紀委員長に  
きゃみ…咬みきよろ、  
咬み殺される。

連絡網もらったしここは  
誰かに電話をかけよう。

さて誰にするか。

電話をかける候補リスト

沢田 綱吉 さん

獄寺 隼人 さん

山本 武 さん

京子ちゃん。

か

自宅。

だがさつきからかけてるのに話し中。

しまいには

『おかけになった電話番号は現在、使われておりません』

の機械音。

家に帰りたいのに帰れない。

「あー、くるみを返してくれー」

やけくそだ、もうどうにでもなれ。

その拍子に

私は路地裏に回った。

薄暗くて狭い通路に

ゆっくりと進む。

右に曲がると小さな  
灯りが灯っていた。  
レンガの壁づたいに  
進めば、

そこはー

カランカランー

「いらつしゃい。あら、  
学生さんじゃない？  
カウンター席に  
座ってくれるかしら」

促されたので  
カウンター席に座った。

ちなみにその店員さんらしき人は  
『さつきあなたとすれ  
違いにお店をでたのよ』

とか言ってる。

私？

そんな人とすれ違って  
ないというか  
一人だったし。

「その制服、

並盛中でしょ？

ダメよ〜学生さんは  
こんな路地裏に来ちゃ  
」

店員さんは

グラスを拭きながら  
ミルクティーでいいか  
聞いてきた。

「あの…え〜と」

「姉さんと呼んで」

姉さん？

え、姉御なのか？

「姉さん、

私のお家は  
どこですか？」

「あら！？」

酒でも飲んだの！？

今回だけは  
見逃してあげるわ  
(ダメです)「

「気づいたらここに  
いたんです。

日頃の行いが  
悪かったからバチが当た  
ったんですかねえ…

「言してあげる」  
はい?」

姉さんは怪しく笑う。

「だ〜か〜ら〜、  
助言してあげるって  
言うの」

ズバズバ今日の出来事を  
当てる姉さん。

あなたは  
エスパーですか?

「そんで、ここに  
行ってみるといいよ。  
大丈夫、暗くならない  
うちに着く範囲だよ」

話に着いていけない。

「ほら、行きな。

ああ、ミルクティー代は  
いらんよ。

次のお客にツケとして  
まわすから」

いいのかよそれで!?

「なあに、平気平気!

無銭飲食の相手に今日と

言う今日は取っ捕まえて

やるんだから!!

このままじゃ赤字に

なっっちゃうのよ。

本当に

や〜ね〜(以下省略)」

渡された地図は

なんと!

電話をかける候補リスト  
の人の

自宅の地図だった。

「あの店員さん  
…何者？」

ちなみに私の自宅は  
余白に住所がご丁寧  
に都道府県から  
書かれていた。

ここからどこも  
暗くならないうちに  
行ける範囲だった。

よく考えて  
選んだのは…

ピンポン

インターホンを  
ワンプッシュ。

玄関の扉が開くと

出てきたのは

「あつ、転校生の……」

「都希です」

「都希ちゃん、  
どうしたの？」

「京子ちゃん……！  
ぐすんっ……」

「家にあがって  
あがって」

結局京子ちゃん家にお邪魔させてもらっている。

京子ちゃんの部屋は女の子らしくかわいい部屋だ。

今はそこで会話を

楽しんでいる。

「今朝は本当に  
大変だったよ」

「転校生は  
大変だよね」

いかん！  
危うく本当のことを  
話してしまいそうに  
なった。

「自宅の鍵を家に  
忘れちゃって、  
親も仕事でいない  
なんて…」

そういうことに  
しておいた。

この世界に親はいない。  
身内も私だけ。

だって

タイムリープしたら  
灰色の道路に出たのだ。

そこがこの世界。

そして私は  
並盛中学二年生の  
転校生（表向き）  
として  
明日も行かなくては  
ならないのか…。

「ところでさ、  
並盛商店街って行った  
ことある？」

京子ちゃんは目を瞬き  
してからニッコリと  
笑った。

すっごい  
かわいい…／＼。

女の私がドキドキする  
くらいだ。  
男が見たらそりゃあもう  
あれだな、うん。

「並盛商店街の路地裏に  
コーヒー屋があるの  
知って…る…？」

ニッコリスマイルから  
目をキラキラ輝かせた。

「並盛商店街に路地裏があることじたい初めて知った!!  
それでそれで!?!」

興味津々に  
聞いてくるので全部話す  
ことにした。

数十分後―

「京子ちゃん、  
今度一緒に行こうね?」

「うん!!その時は  
都希ちゃんが  
道案内してね!」

頷こうとした時だった。



入ってきた。

「あっ、お兄ちゃん  
おかえりなさい！」

んんん、

おお兄ちゃん！！？

ええーちよつと以外！

お兄さん超熱血じゃん！

…ところで

極限って何だ？

「おお、京子ー！友達  
連れてきたのかー！！」

「うん！都希ちゃんって  
言うんだ。

今日ね

転校してきたのー！！」

「うむ、都希！！…家で  
ゆっくりしていけ！」

「ありがとう

ごぞいますー！！…」

そんなわけで  
今日は京子ちゃんこと  
笹川家にお泊まりする  
ことが出来た。

夕飯のカレーライスは  
スパイスが効いてて  
おいしかった。

お風呂場に向かう  
準備をして、  
台所を通ったら  
パチンと音が鳴った。

そのまま無視して  
風呂場に向かい、  
お風呂に浸かった。  
柑橘系の入浴剤が  
いい香りを  
風呂場一面に出す。

そして立ち上がろうと  
した時、

世界はねじれた。

## 9 通り抜ける壁（前書き）

展開が早すぎて  
すみません。

コーヒー屋の店員さん、  
姉さんが  
よくしゃべります。

主人公の名前が  
前話に思いついて  
そこから  
載せていますが、  
やはり原作の名前を  
使うべきか悩んでいる  
作者です。

## 9 通り抜ける壁

周りの景色が巻き戻しの  
ようにグルグルと  
回り始めた。

吐き気がする。

「都希ちゃんっ!?!」

最後に聞こえた声は、  
京子ちゃんが私を  
呼んだ声。

景色の回転は速まり、  
体が宙に浮かんだ。

私は  
この感覚を知っている。

タイムリープだ。

今回は例がないから  
保障はない。

この際元の世界に帰れる  
なら何でもいいや。  
ごめんね、京子ちゃん。  
さよならー

「キヤツ！？」

景色の回転はない。  
ここは私の部屋だ。  
階段を降りたら、台所。  
朝食のトーストが白い  
皿の上に乗っかってる。

時計を確認すると  
いつもよりかなり  
遅れてることに  
気づいた。

急いで玄関を出て、角を曲がったとき

「キヤツ！！？」

「わっ！？」

通行人にぶつかった。

空中にたくさんの  
木の実…？

くるみが舞い散った。

「ごめんなさい！  
くるみ拾いますね？」

私はしゃがむといきなり  
通行人が  
手を掴んできた。

「後一回」

え？

二の腕辺りを指差すので  
確認してみると  
火傷の痕があり、  
01と二の腕に  
浮かび上がっていた。

「何これ…？」

通行人は  
フードを取った。  
ニヤリと笑う顔は今日  
並盛商店街の路地裏に  
あったコーヒー屋の  
店員さん、姉さん。

「また会ったね」

「またつて…、あ」

私の手は姉さんの体を  
すり抜けた。

もしかして…

私は消滅したの？

「おやおや、

魂だけ戻って来るとは」

魂だけ？

「よく話を聞きな」

姉さんは私の通り抜ける  
手を掴んだ。

「こうなったらもう

選択肢は三つだよ」

一人で解釈してないで  
教えてよ。

「…しょうがない、

教えてやるよ」

つまり

こういふことらしい。

元の世界に戻って  
来たのはいいが

魂だけらしい。  
体は京子ちゃん家にいた  
まま。

二の腕の01は  
後タイムリープ出来る  
回数、一回だけ。  
今まで気づかなかつたと  
言えば姉さんは  
ずっと在ったと言う。

選択肢

1 このままここに残る。

2 京子ちゃん家に  
タイムリープし、魂と  
体が合わさったときに  
奇跡的にタイムリープが  
起こるのを待つ。

3 強い衝撃を受ける。

3 はないだろ普通に。

「意外に確率高いのよ」

姉さんは

ニコニコしながら話す。

「ほら、よく体に強い  
衝撃を受けてトリップ  
した人とかいるでしょ？  
マンガの世界に  
来ちゃいましたって」

「体に強い  
衝撃って何？」

「それはこの小説では  
話せないわ」

「姉さん

誰に言ってるの？」

「着地した場所を  
読んでくれる

拝啓読者様に。

だいたいね、そんなこと  
記載してみなさいよ。

1うんさい未満は  
読まないで下さいになる  
可能性があるの」

何言ってるの？本当に。

「人の人生は  
人それぞれ。

ましてや赤の他人が口  
出すなんて図々しい  
でしょ？」

決めるのは  
あなた何だから。

「あなたの名前は都希。  
時をかける少女だけに」

「おいそれ  
バカにしてるのか」

「いや、そういう  
意味じゃなくて」

姉さんはため息をはいて  
眉を下げて言う。

「早く決めて。  
じゃないとチャンスを  
逃すことになるから…。  
また会ったらその時は」

「答えがあるはず」



10 懐かしい雰囲気

「姉さん、私…」

「言いたいことはよう  
わかる」

頷く姉さんは

その白い手で私を

押した。

下にはあるはずのない  
道路に

私は冷や汗をかいた。

ただいま逆さの状態で

片足が姉さんの手に

助けられている。

「いい眺め」

はい？

さつきから姉さん言動が

おかしいよ。

間違いなく。

「都希は3の強い衝撃を

受けるにしたんだろ？

いや〜度胸あるねえ。

もんのすごく痛いさ〜？

喜んで姉さんはあなたの  
トリップのお手伝いを  
させていただきます。  
シチュエーションは  
こうよ？

あなたは  
つまらない毎日にあきれ  
果てて  
刺激を求めていた。  
同時に  
ひどい眠気に襲われて  
手すりから滑らせた。

体が宙に浮いてー」  
「あああ!？」  
もう結構、  
滑稽(？)素晴らしい  
シチュエーション  
どうも!!  
その先は  
言わなくて結構です」

そうだ、  
実際に体に起きたら  
痛いじゃ  
すまないぞこれは。  
それに、  
私はさっきまで自宅の

角が歩道橋の橋にいる  
なんて

おかしいでしょ!?

「曖昧な記憶、

それは現実と虚構に  
紛れていくー」

「何カツコつけてん  
わあ!!?」

少し地面に

顔が近づいた。

「ホホホ、都希さん。

否定的な考えでは

ダメですよ?

親しきなかにも

礼儀あり」

意味違うような…。

「そんな口を叩けるのは  
今のうちよ」

「ちよっ

…脅さないですよ!?

それより、

トリップって何!?

切なる願い。

「今更!？」

姉さんは

その意味知ってて

決めたと思ってたが

まさか都希

好奇心で動くの?」

今気づいた。

姉さん私の許可なしに  
呼び捨てしてる。

「前話くらいに話した  
はずなんだけどな」

ええ!？」

前に話した!?!？」

…ん?

ヤバイ、

私姉さんの訳の

わからない言動が

移ったかも!?!?!？」

「しょうがない、

姉さんはいじって快感を

える生物ではないので

このシチュエーションは

止めてあげよう」

そう言って

姉さんは私を一気に  
引き上げた。

女の方じゃな

「都々希々？」

何か言った？」

「特に何も。

姉御、それより次の  
シチュエーションを  
頼むぜ！」

と言ったら

超機嫌良くなった。

私は姉さんのような女に  
なりたkyu

「そんなこと考えてると  
今度こそ

トリップさせるよー」

すいませんでしたっ！

「よろしい、

では覚悟が出来たよう  
なので

読者の皆様！！いよいよ  
主人公が最大の決断を  
しました！！！！」

勝手に話し進めてる。

「あ、くしゃみで手が

滑った。てへっ!!」

「はああああ!!!!!!」

????ふざけるなこの

猫かぶりの店員!!

次会ったら

お前の化けの皮を

剥がしてや「姉さんは

あなた様が

またあの路地裏の

コーヒー屋に来店する

ことを心より

お待ち申し上げます」

へえ!?!ちよ!?!」

ドーン

嫌な音がした。  
私は思いつきり道路に  
体を打ち付けて  
自転車に引かれたー

地味に痛いじゃないか。

って言っても  
道路に打ち付けられた  
衝撃は半端ない。  
意識が遠のく…  
私はこのままじゃ  
きつと…。

ーどっになるの？ー

え？

ーそれでいいの？ー

誰？

誰だろうねー

終わりがたくない…。

—自分の居場所に戻れないからか？—

それもあるけど  
この若さでくたばるのは  
嫌だ…嫌なんだ。



「痛い〜！  
しりもちまたついた〜」

私は周りの景色に  
何も言えなかった。

なぜならここは  
私の自宅でもなく、  
並盛でもなくて、

でも、

どこか懐かしい雰囲気  
だった。

ここは夢？

違う、だって…

二の腕の01がー

00になってる。

「しかも何でスーツ姿？  
格好が代わってる」

仕方ないので色々散策  
することにした。  
歩いてて気づいたのは  
少し髪が長くなっていた  
こと。

それとー

「あれ…京子ちゃんと  
花…ちゃん？」

二人が並んで歩いてる  
ことが問題ではない。  
姿が問題なのだ。

「京子ちゃん！  
花ちゃん！」

二人は振り返ると  
こっちに来てくれた。

「都希ちゃん？」  
「お久しぶり」

素直に疑問を述べた。

「何で京子ちゃんは髪が長くなってるの？」

花ちゃんは逆に

短くなってるの？

昨日まで二人は

短い長いで

今と逆だったのに……」

といえは笑われた。

「あんだ、

熱でもあるんじゃない？

昨日ってねえ」

「うん、

私達はその前からこの髪だよ？」

嘘だ、絶対。

「じゃあさこれ見なよ」

花は携帯を取り出して  
データフォルダを開け、  
一つの写真を見せて  
くれた。

「昨日のあんたと京子と  
あたし」

三人で一緒に  
写っていた。

「あたし…ってまさか  
左に…いる？」

二人は頷いた後、  
腹を抱えて笑う。

自分の焦げ茶の髪は  
中学の時は肩が隠れる  
くらいあったのが  
今は背中が隠れるほどに  
のびていた。

嫌な予感がするー

これは女の勘だ。

だから私は自分の携帯を  
開いた。

2010年9月であるように  
願って…

しかし表示されたのは  
2020年8月の  
最終日だった。

つまり現在の2010年から  
10年後の世界に  
来たことになる。

## 11 塗りえのように

この世界にまた戻って  
きたのはいいが  
頼みの綱がない。

10年後の世界はどこも  
変わっていないように  
見えたのは自宅だけ。  
京子ちゃんと花ちゃんに  
誘われてまたしても  
京子ちゃん家に  
来てしまった。

「お茶出すね」

と言って京子ちゃんは  
台所に。

残されたのは花ちゃんと  
私。

最初に口を開いたのは  
花ちゃん。

「あんだ…さ、今日は  
変だよ」

ドキッ…。

「京子やあたしのことを  
さん付け呼ばわりなんて  
やっぱり

ストレス溜まってる？

仕事とか…」

仕事？私が…？

「あなたは何の仕事を  
してるか

あたしや京子も

知らない。」

何で

教えてないんだっけ？

「それは、自分が

そうしたんでしょ？

わかることは

朝早くに出かけて

夜中に帰宅したり、

夜中に出かけて

早朝に帰宅したりしてた

こと」

「え…？

じゃあさ、この服装は…」

「あなたの仕事着」

このスーツが

私の仕事着…。

10年後の私は

何してたんだろう…？

「都希… あんたは

やっぱり変な所に踏み

込んだんだよ。沢田達の

ように足を

入れてはいけない

ところに」

「沢田さん達って

どういうこと？」

花ちゃんは

シートと唇の前に

人指し指を立てて

携帯を取り出した。

「京子には

聞かれたくない話なの。

あの子が知ったら

ダメなの…わかった？」

頷くとニツと笑い

私は

驚愕の事実を

教えられた。

「そんな…だって

あの沢田さんが？」

「そうだよ、

見に行きたいなら

行けばいい。

目印は高層ビルの高さ

くらいの建物を

めがけて歩けば着くよ」

「あれ、都希ちゃんは」

お茶をおぼんに伸せて

きた京子ちゃん。

「ああ、仕事が急に

入ったんだってさ。

ごめんって伝えてって」

「…そっか…久しぶりに  
会えたのに…」。

最後に会ったのは

並盛中の卒業式と離任式  
だったね」

「あの後、京子は  
電話やメールが一切通じなくなった。  
そして今になって  
返事が帰ってきている  
でしょ？」

花は何でもお見通し。  
人の恋路も、  
考えていることも。

「ツツ君元気にしてる  
かな？」

「あ…ああ、元気だよ。  
この前  
メールが来たじゃん？」

「でも、会いたいな…。  
きつと  
会社の取引が終われば  
また会えるよね？」

希望に満ちた目。  
花は悩んだ、京子には  
沢田のことについての  
真実は  
何一つ話していない。  
単なる自分の推測に  
すぎない。

けど、

さっきの都希の様子を

見ると別人みたい

だった。

まるで記憶を

塗り替えられた人の

ように。

京子もわかっているのだろう。

沢田が

会社の取引を成立

させたら、

日本に帰って来るのは  
ほとんどなくなることを。

だからあえて都希を

行かせた。

今の都希は外見は大人

でも、

中身は中学生っぽい

雰囲気だから。

目の前に建つ高層ビルの名はボンゴレ。

中学の時にちよろちよろ聞いた。

リング争奪戦とか…。

相撲の試合とか言ってたみたいけど。

明らかに違うでしょ。

指輪を奪い合っつて、

つまりあれだ。

結婚相手のために若い

うちから最高の指輪を

探し求めてたのだろう。

いい話だ。

ウィーン

自動ドアが私のために開いてくれる。

外見より、

かなり広がった。

ロビーに受付嬢が

営業スマイルしている。

よし、ついでだ。

「すみません」

「はい、どのような

御用件でしょうか？」

受付嬢は

相変わらず営業スマイル

なので率直に述べた。

「社長に会わせて

もらいたいの。

沢田さんに」

すると

営業スマイルは消えた。

上から下までジロジロと

見て、受付嬢は

困ったように笑う。

「すみません、

どちら様ですか？

身分証名証の

提示をどうぞ」

持っていない。

「社長は忙しいので  
また来てくれますか？」

「嘘つく受付嬢は  
嫌います」

顔を真っ赤にして  
あたふたする受付嬢。  
何だ、可愛いところは  
一つはあるのね。

「か…からかわないで  
下さい／＼／」

「フフ、  
からかうだなんて  
とんでもない。  
貴重な時間を  
割いてしまって  
申し訳ないわ。

あ…  
知り合いを見つけたから  
失礼します」

一礼してから離れる私。  
もっとからかいたいが

それはまた後でにして。

「獄寺さん」

「あ？」

加え煙草が  
ポロリと落ちた。

「お前っ

何でここに！？」

「やっぱり

獄寺さんでしたか…。

銀髪の少年は未来では  
もっと

目が鋭くなっ…あ！」

「心の声が口から  
漏れてるぞ」

そう言っつて獄寺さんは  
ついて来いと呼ばれる。

エレベーターの中。

最速最上階まで  
でも十分はかかる  
らしい。  
そこからまた歩くので  
ここで  
体力温存しておこう。

獄寺さんは煙草に火を  
灯す。

「なあ…お前は  
昨日任務で空港に  
行ったんじゃないのか？  
何で帰ってきた」

「任務って…何？」

「は？」

目を白黒させる  
獄寺さん。  
しまいには  
溜め息を吐き出す。  
そして睨み付ける。

「ふざけたこと  
ほざいてんじゃないよ」

「真剣よ！  
私は自分の」

自分の何？

一体何しに来たの？

「……………っ！」

「おい、

どうしたんだよ？」

激しい吐き気が襲う。

二の腕辺りが

焼けるように痛い。

これは何？

思い出せない。

京子ちゃんと花ちゃんと

会って…

どうしたんだろう？

花ちゃんにすすめられて

ここに来たけど

何でだ。

「ゲホッゲホッ…」

「気分悪いのかよ？

まさかつ！！

エレベータ酔いか！？」

首を横にすれば

残念そうにする。

あまりにも

苦しすぎたため

座り込んでみた結果。

ポンツと音が鳴った。

獄寺さんは十年

バズーカーと呟いた。

淡いピンク色の煙に

包まれて目を開けると

私の体は

「何でー？」

10年前の姿に

戻っていた。

と同時に10年後の記憶が  
頭に流れ込んだ。

「キヤアア!!!」

成人式。

願掛けの髪と

心に固く誓った覚悟。

京子ちゃんや花ちゃんの

前から姿を消した私。

冷たい目の自分。  
映るのは怯える相手。  
指輪からキレイな炎を  
灯して微笑む。  
さよならを告げる序章。

一面の光に包まれていき  
相手は倒れていく。

命を奪った、  
自分は殺したのだ。  
重罪有罪。

「や……だ」

「おいおい、何が  
どうなってんだ!？」

恐ろしくなった私は  
小刻みに震えて  
立てなくなる。  
中指には忌々しい指輪、  
リングが  
はめられていた。

「こんなの…!？」

思い切って  
外そうとした。

でも手が止まる。

「放しなさいよ！  
外させてよ！！！」

「落ち着け」

「私は  
この忌々しいリングの  
せいで…。  
どいて！！！！降りるわ」

しかし私の行動は  
無意味だった。  
頭上に飛ぶ燕がひどく  
体を疲れさせる。  
催眠術のようだ。

チンツー

最上階に着くと私は  
獄寺さんに引きずられる  
ようにして  
連れていかれた。

前方から歩いてくる人は

「山本さん」

だった。

「侵入者かと思って  
匣開けちまった」

懐から箱を出すと燕は  
入っていった。

マジシャンなのか？

「悪いな舞鶴、  
寝ちまった方が楽だぜ。  
獄寺と俺で運んでやる  
からよ」

「断る！！」

差し出された手を  
押し返して後ずさる。  
今の私には恐怖が強い。

「来ないで…来たら  
ここから  
飛び降りてやる！  
近づいたら許さないん  
だから！！！！」

少しずつ距離をとり、  
逃げ道を確認する。

このビルから出たら直ちにこの町から出なくては行けなかった。  
追う立場から追われる  
立場になりうる可能性は  
高い。

ダッ！！！！！！

気づけば

非常通路に走り出した。

「獄寺！？」

「行くぞ」

後ろから二人分の足音。

恐い、捕まったら明日の  
太陽を

拝めないかもしれない。

それだけは何としても  
避けたい。

「キャ！」

階段で転び落ちる。

そして

拳に包帯を巻いた人に  
手を伸ばされる。

「お前は…都希か？」

京子ちゃんのお兄さん。

その手を避けて  
再度走り出す。

上から

「芝生頭、捕まえろ」

「頼むぜ！」

こんなことをしている  
うち徐々に距離を  
詰めてくる。

「はあはあはあ…」

息切れが激しくなる。  
非常通路から脱出すると  
真横に鉄の棒が飛んで  
きた。  
ほんの少しでも軌道が  
ずれていたなら  
顔面に直撃だった。

「ワオ…かわすなんて  
どこで覚えて  
来たんだい？」

「雲雀さん…」

後ろの声が近づく。

「どいて下さいー！ー！」

そのまま走っても  
止めないから  
振り返った。

何か策略あるのか？

そう考えていると、  
いつかのフサが現れた。

「クハハハ、

お久しぶりです」

「ひっ…フサ頭！？」

パイナツポ―

出たああああ！！！！？」

「おやおやそのような

名前を呼ぶとは…悪夢を

見せてあげましょう？」

藍色の炎が

キラリと光った。

身の危険を感じ、

真横に在った扉に

逃げ込み

鍵をかけて一安心。正面のガラスに太陽が  
反射して眩しい。

「…おかえり舞鶴…

いや、都希」

ツンツン頭だけは

しっかり見えた。

後ろは扉を叩く音。

もう逃げられない。

それより、  
舞鶴って私のこと？

「忘れているんだね…。  
それとも知らないのか、  
やっぱり君は

過去の都希ちゃん  
なんだね…」

推測だけ…

彼は微笑んだと思う。

後ろの窓ガラスが  
眩しくて見えないから  
真相は解らないけど。

「あの…！」

聞きたいことがある。  
そう言いたかったが、  
後ろの扉が乱暴に  
開いた音と同時に  
ガラスに向かって走り  
出していた。

獄寺さんや山本さんも  
驚くのだろうか？

私がガラスに  
向かったこと。

大きな音と一緒に  
落ちていく自分を。

彼らは気づいてくれたの  
だろうか？

小さく呟いた私の言葉。

「ーお邪魔して  
ごめんなさいー」

11 塗りえのように（後書き）

10年後の世界の背景は  
まだ続きそうです。

そろそろ

並盛商店街の路地裏に  
ある

コーヒー屋の店員、  
姉さん

登場させますかな…？

## PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になるうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能<sup>たんのう</sup>してください。

---

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。  
<http://ncode.syosetu.com/n1464/>

---

着地した場所は

2010年11月17日02時52分発行